見真

み仏の誓いを信じ　尊いみ名をとなえつつ
強く明るく生き抜きます

み仏の光りをあおぎ　常にわが身をかえりみて
感謝のうちに励みます

み仏の教えにしたがい　正しい道を聞きわけて
まことのみのりをひろめます

み仏の恵みを喜び　互にうやまい助けあい
社会のために尽します

教書

宗教の課題と現代

宗教は、人間のかかえている究極的な問題、すなはち、老病死の苦悩の解決にかかわるものであります。釈尊が出家される機縁となったのも、その問題であり、老病死が迫っていることに気付く時、人間は、今ここに生きていることの意味を問わずにはおれません。この問題を解決しようとするところに、宗教の根本的な意義があります。

しかしながら、私たち人間は、歴史的社会的な制約の中に生きているのであり、宗教もその外に立つことはできません。とくに現代は、人類がいまだかつて経験したことのない変動の時代であります。それは科学と技術の発達や、産業の発展の上に顕著に見られるところですが、それだけではなく、その変動は人間の内面にも深い影響を及ぼしています。

技術の進歩と経済の発展は、人間の夢を次々と実現させましたが、それにともなって人間の欲望をも限りなく増大させました。他の人びとを顧慮せぬ自己中心的な欲望の追求は、差別と不平等を生む源となっています。人間中心の思想は、一面では自由と平等の実現のために貢献してきましたが、他面では人間を絶対化し、争いや不安を助長することにもなりました。

また都市化による地域共同体の弱体化や、大組織による人間管理の強化によって、人間は自らの依るべき根拠を失いつつあります。その結果、自己自身を見失い、ひいては他の人びとの人格や、生命一般の尊厳性をも正しく見ることができなくなってきています。しかもこのことは、人類の文化、さらには宗教にも影響し、伝統的な宗教の基盤をゆるがしています。

このような人類存亡の危機にあたって、一時的な慰めではなく、真の人間性を回復する道を見出すことこそ今日の宗教の使命であります。そのためには、私たち宗教者は、世俗的な力に迎合することなく、自らの信ずる教えを真摯に究めるとともに、同じ道を歩もうとする人びととともに手を携えて努力しなければなりません。さらに、歴史と伝統をもつ他のすぐれた宗教との対話を試みることも必要と考えられます。

浄土真宗と念仏者の責務

親鸞聖人を宗祖と仰ぐ私たちの先人は、七百年を越える歴史の中で浄土真宗のみ教えをうけつぎ、念仏の道を伝えて下さいました。それは輝かしい伝統でありますが、今日、ともすればそれが単なる形の継承に終わろうとしているように思われます。私たちはそのことを謙虚に反省し、伝統の中からあらためて真実の精神をくみとらなければなりません。

阿弥陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、浄土で真のさとりに至るのが浄土真宗であります。このみ教えを聞き、それに信順して生きぬくところに信心の行者の姿があります。その生活は、如来の本願を究極の依りどころと仰ぐとともに、罪悪生死の凡夫であることにめざめた、喜びと懺悔の生活であります。さらに、如来の大悲につつまれて、人間相互の信頼を確立した御同朋御同行の生活でもあります。そこに、自分だけの殻に閉じこもらず、自分自身がつくりかえられ、人びとの苦しみに共感し、積極的に社会にかかわってゆく態度も形成されてゆくでありましょう。それが同時に、開かれた宗門のあり方でもあります。

宗門の基幹運動は、それらの目標を、人びとのふれあいの中で一つひとつ着実になしとげてゆくところに展開してゆきます。もとより、私たちの一人ひとりが真の信心の行者になってゆくことを根本にしていますが、それとともに、今日及び将来に向かって、全人類の課題を自らのものとして担う積極性が必要です。そのための基礎となる教学の形成と充実をはかり、それをふまえて、宗門内にとどまらず、広く世界にみ教えを伝えてゆかなければなりません。次代においてその中心となる宗教的情操豊かな青少年の育成も、私たちの責務であることは言うまでもありません。そこに宗門の本当の発展が実現されるでありましょう。

念仏は、私たちがともに人間の苦悩を担い、困難な時代の諸問題に立ちむかおうとする時、いよいよその真実をあらわします。私はここに宗祖親鸞聖人の遺弟としての自覚のもとに、閉ざされた安泰に留まることなく、新しい時代に生きる念仏者として、力強く一歩をふみ出そうと決意するものであります。

一九八〇年四月一日

浄土真宗本願寺派門主　大谷光真

即如門主が決意と抱負を示された教書

本山ご門主　1月末～2月初　福岡教区をご巡教

1月30，31日 上下組へ　会所は三奈木 品照寺で

西本願寺現門主は「教書」の趣旨を推進させるため、本年度より全国を、ご巡教されることとなり、福岡教区では今回次の五組が選ばれた。

一月二十九・三十日　嘉麻組（長源寺）
一月三十・三十一日　上下組（品照寺）
一月三十・二月一日　早良組（栄福寺）
二月一・二日　那刻組（法善寺）
二月一・二日　三門北組（専修寺

上下組では、一月三十日に三奈木の品照寺を会所にお願いして、お出迎えから各種行事が執り行われ、翌一月三十一日は「お立寄り寺院として久喜宮三ケ寺（建立寺・西宗寺・長念寺）が予定されている。

夜須組にも、近く五年以内に同じく、ご巡教がなされるはずである。

組巡教の主旨

今度の組ご巡教は、ご法義の隆盛をはかることを目的とされたことは勿論であるが、地方の実情を把握することによって、今後の宗門の運営に資すること、話し合い活動の中で、法義上の問題を中心に信仰運動の基幹になるものを進展させようとするものである。

上下組ご巡教日程

一月三十日（土）
十二・〇〇　品照寺ご到着
十三・〇〇　式典
十五・三〇　帰敬式（おかみそり）
十六・三〇　話し合い
十八・〇〇　夕食・休憩
十九・〇〇　話し合い
二一・〇〇　宿舎へご出発

一月三十一日（日）
九・〇〇　宿舎ご出発
九・〇五　久喜宮三ケ寺ご巡回、長念寺にて御言葉。

発行所　甘木・朝倉浄土真宗文書伝道部　　甘木町　長念寺内　　印刷　神坂印刷　　昭和５６年12月発行

夜須　西福寺

福岡行き普通バスで石櫃停留所を過ぎて少し行くと斜め右の方へ本堂の屋根が見えるお寺が耕月山西福寺である。すっかり稲が刈りとられた晩秋のある日西福寺を訪ずれた。お寺の前に観音堂がある。もう百数十年にもなるだろう一本のモミジが今を盛りに真赤に紅葉し、観音堂、山門、鐘楼後に本堂が並び、山門の右側には予定行事と法句が書いてある。山門を入るとすぐ目につくのは本堂の瓦の色と曲線美、そして十数本の相当年数を経たであろう大きなマキの古木が綺麗に剪定され、大きな庭石、ツツジが配置され、その間に剪定されたモミジが紅葉し晩秋の落ち着いた風情である。また第十一代、第十二代住職の業績を称えた「頌徳碑」が井上円了文学博士の筆による立派な碑が建っている。特に第十一代住職は真宗教団に於ける碩学であったという。

呼び鈴を押して案内を請うと坊守さんが出て来られ来意をつげる。よくいらっしゃいました。どうぞと案内され、先ず本堂に参詣。応接間にすでに住職は待っていられ、ご遠方ようこそお出で下さいましたのご挨拶。おいしいお茶をいただきながら西福寺の由来をお聞きする。

先ずこれをと出されたのは表装された巻きもの「中牟田村西福寺由緒記」と達筆で書かれている。余りにも達筆のため解読するのも困難。

由緒記によれば、西福寺は今から五八〇年位前（応永年中とあるから四代将軍足利義持のころ）足利の家臣税田小四郎種吉と名のる人が当所に居を構えていた。ある日ひとりの老翁が来て小四郎に告げて申すには「この地は穀豊饒の地である。云々」と……西方さして行方知れず。小四郎は「奇異なことこれは仏菩薩の化身なり」と仏殿を建立し耕月庵と名づけ牟田を開いて一村をつくった。これが中牟田村であるという。

小四郎から七代の孫税田若狭三代の孫後太郎兵衛の時筑後の国の田中三部殿舎弟入道宗順が太郎兵衛の頼みにより養子となり摘女と夫婦となり後に耕月庵に隠居し、寛永七年十月二日（三百五十一年前、徳川三代将軍家光の時代）京都本願寺へ寺号を乞うて顕如上人御自筆名号いただき西福寺の号を賜わった。しかし御真筆名号は今はない。現住職は第十五代である。

尚当寺には左記のようなる文化財になるようなものがある。

・天満宮安楽寺流失文化財「仏典・ご文庫等一括」
・明治維新の志士　木戸孝允の書
・第六迦葉仏画（二一四四年前）
・茶ツボ（室町時代作）
・即非書（北九州市広寿山開基）

上下組　長念寺

寺伝によれば、続日本紀宇佐八幡記に伝えられているように、和気清麻呂が、道鏡一派の襲撃をうけて足に重傷を負い、北九州の山中の霊泉に浴して足が立つようになったことから、その山を足立山と名づけ、また我が子に足立の姓を名のらしめた。その流れをくむ一族が関東武蔵国足立の郡（現在の東京都足立区、埼玉県足立郡）に住していたが、のち九州豊後の採題に役職を得て赴任した。

大友宗麟の時代に故あって豊後を去り、筑前秋月種実に庇護されて、一族は麻氐良城と豊後境いの要衛を守った。

大友勢の秋月攻撃の際に麻氐良城は敵襲をうけて多くの将士を失い、また豊後境いの要衛を守っていた一族も多数討死した。

城主足立帯刀消紹の兄は麻氐良城戦殁将士を弔うために志波に一寺を建て、別に弟は豊後境いの要衛で討死した将士のために久喜宮に一寺を建立したのがこの寺の開基である。

寛永二年、慶用の時代に真言宗より専修念仏に帰依し本願寺准如上人より足立山長念寺の寺号と木仏本尊を許された。

江戸時代は念仏弘通のかたわら寺小屋として多くの子弟を教育し、今はまた幼稚園を経営し幼児の宗教教育に努めている。

現住職は十六世足立肯甫師、副住職は恵純師であり聞信徒会の充実した組織のもとに、年輪会、仏壮、仏婦、若婦などの聞法グループの活動がさかんである。

おしょうしんげ

得至蓮華蔵世界
即証真如法性身
遊煩悩林現神通
入生死園示応化

お経さんを修多羅といいます。スートラのことで、「まごころ」の意味であります。仏さまの「まごころ」をいただいて、それぞれに幸せな日をおくりましょう。

お経さんをいただいておれば、仏さまのまごころのこもった御本願のありがたさがわかります。

そして、お友達といっしょに、いつもの日ぐらしのなかに、よろこびと希望が湧いてきます。

ぞうのはたらき

かぜが はげしくなると、もりの きの、えだとえだとが すれあって、ひをおこして かじになりました。

もりのなかには、いろいろのことりや、たくさんのけものが すんでいました。しかし、よるのことで、みんなは ねむっていて、なにもしりませんでした。

このかじに きづいたのは、もりのむこうのかわに みずをのみにきていた ぞうだけでありました。

ぞうは、もりのかじを みると すぐ、はないっぱいに みずを すいこんで、もりのほうに はしって いきました。

そして、すいこんだみずを、ちからいっぱい かけてやりました。

「かじだ！はやく にげるのだ！」といいながら、もときたみちを かけて いきました。

「みんなを たすけねばならぬ。」と けっしんした ぞうは、かわと もりとのあいだを、なんども なんども いったりきたりして、みずを はこびました。

よがあけて、かじが しずまったころ、ぞうは つかれて たおれて おりました。

わいわい さわぐこえに、めを ひらいてみますと、はねを やかれたことりや、てあしを やけど したけものたちが、ねるところと たべものを なくして、しんぱい していました。ぞうは、じぶんの つかれを わすれて、

「みんな、げんきを だすのだ。わたしが あんしんして すめるところに つれていってあげる。あるけないものは、わたしのせなかに のりなさい。よわっているものは、わたしのしっぽに つかまりなさい。ことりは わたしのみみたぶを くわえなさい。」といって、みんなを つれて いきました。

ぞうが つれていったところには、ことりのすも、けもののねぐらも、そしておいしいたべものも、ちゃんと ようい してありました。

みんなは、こころから よろこんで、それからは、そのぞうの おてつだいを するように なりました。

伝えたい　ふる里の心　（その5）

佐野　至

十一月は七五三で着飾った親子姿が目立ちます。そしてそれはすべてが宣伝と格好の世相なのです。商業ベースに乗せられた七五三は考えものですね。

「この子が健やかで、利口に育つように」の気持はもっともですが、学校に行きはじめるとすぐ成績は、算数は、ということになってしまいます。

仏教のお念珠（数珠）は古くから手さぐりの計算器としての役目もありました。算数々々と心配するまえにもっと幼児期にお念珠を近づける生活がほしいものです。

—・—・—・—・—

現代子は一人ではいい子が、何人か集ると悪い子に急変します。家でいい子が学校や社会では非行に走ります。不思議です。

過保護と過知識は精神の弱い人間をつくり、お互を傷つけます。テレビの番組にいい子、悪い子、普通の子と出ますとそれなり面白く格好がつきがちでやがてそれが流行します。格好の良さは、いつのまにか目に見えない心を蝕んでしまいます。格好のよさより格好の悪さの追求が必要です。

—・—・—・—・—

三輪町浄光寺名物「臥龍の松」が枯れておしい気がします。上寺の教念寺、長田の正福寺境内に大きな樹があります。夏の日陰、秋の落葉は寺の宝だと思います。ロケットが宇宙に、すべての人がいそがしく、心の休まるひまもない時、だれもが欲しいのは、気の休まる静かで安心のおけるやさしい空間です。そしてそれは寺の境内に残された大きな木陰です。

またお寺の屋根は高くて大きいのがい、、それは思い出のふる里の景色、忘れ得ぬお寺の屋根と秋の夕暮、大樹の根もとで遊んだ日々をよみがえらせてくれます